



13
1245
5

新巻 驚奇俠客傳 第壹集卷之五

東都 曲亭主人編次

第九回 御士二公 癲病人の遇ふ

光棍初々 舊悪を懺悔せ

再説著演の那銅算を索難て従者と共侶の花水橋を彼此と且く徘徊
する程の高麗寺村の方よりして五六個の里人が一個の社交を網て這方と投て牽
の束ねるを近づき隨ふとこれ這社交の別人多きある橋の上へ介抱
を金二兩を取せる癲病病であつた亦復疑訝りて吐裏の事原來彼社交を
舊悪ありて囚れ然らば竊疾ありて緯の及ぶる人同義と程の那里人の
その中相識する由一人あり原是藤澤の程遠くある里人某が獨り小正二と喚
るもの且裏の他が兩親の長は病着ふ生活の便りを失ひ朝の煙も絶え折著者演他

史家傳第一輯卷五

目録五五五五

米と取せ銭とせめて西之面艱苦を極むる者なりとあり。さて兩親世を去りていづれその里に住
 やびん筆把る支の人をねれ或人の姉せられて紅粉阪の柳巷ふ赴り地方の書役
 とつりりふりて年来と経るる登時小正二の著演をて遠く走近つて腰を折めり
 むち檀那久くち絶望のぬくまをくぬ健ふたりまをを飲ひしれん今朝と何
 処と早く出さるゝとと問れて著演せられたる昨日梅澤の通家許却て小夜
 深き山に留られ今朝未明より還る折ありふ索るものあり具は徘徊する和主のうへ徳
 里長の噂は信ぜざるが恙もなきことを受て就て詢え一談ありその杜伎の何ぞの故細
 められて牽き入る聊少くもあれ情由も具はせしめし。這里中て足と駐る心つたつた
 仍ふ似れその崖略を示しねり。とありて小正後方をさるる向せぬ彼囚徒の目四郎と喚
 做る宿所不定の破落戸へいづれより俺花柳の遊女鏡屋の紅毫と遊女駒添て
 幾夜ささるる程の賄ひする遊女の價の十四五金及び債りの債りの貴のを豫宿

所は佳々の里とありて搗鬼とせしめぬ噂もなき主人の堰て紅毫は絶てあせむる
 甲昨夜那奴が推て來り遊女の古借を取せん快紅毫とせしめし。且そは金を
 進与ぬと催促せられ絶つ圓金二兩を取出で妓有の投與へし左右も受を推戻して
 賄ひされ金三兩の十四五両でわぬものもなき。十が一の足らぬものもなき。殘は進与
 ぬひねとの果は声も立て古借の翌のへも取せん且その金を受收せ快紅毫は逢
 せよとのひも妓有のひも聴く。云々と論せし目四郎大に罵狂ひて矢庭の妓有を
 搦倒し障子隔亮と蹴破ると鄰坐席の茶盤を踏蹴り擲ちる狼藉のへりも
 わるれ人許りて前後より組禁め繩を被て一夜さ成すを曉し然る昨夜の在下の
 衆りのふ拘づらして目睡もせぬ文書と写め却鎌倉の同注所へ牽りてまると佳とせし
 許さるるんそ那次鏡屋の人々ともつれられて黎明より此處里まであると辞せし
 其れも著演せられたる。原來彼目四郎をん喚る杜伎の色もその身も持崩と

衆皆うちやて且敬馬且敬以齊一進近つて一箇々も名告ぎつ然る方々も知
 らざと大くお礼を付けぬ九さやとち暗話る。ち中か女鏡屋の主人い又恭しく
 著者演うち對ひて既おせぬふぐどく。昨夜這人の理不盡さうと捨かゝる生活の
 妨ふりゆへに己とを録倉牽のちとつるわも大人の亦肉と由縁ありとて示
 させぬ和談の只這人の幸いのみあつて亦俺們が然り許されれば解果るまで雜
 費も言く没るよと名高大人まおられれば後産疼ま心安る素より佳客
 ぞねどもおれどて月來の所給るはひねの債の金後々まもれあろむ掛あひと且
 本人と遮与一まらん縛縛の繩と解志と繩より男とをせぬと答てあちとつ
 組るを緩る程おの餘のものも偽りて目四郎お被さる繩とを解き解けり然
 程目四郎のさの著者演が取せぬ那金もて紅毛の會んと及び胸匠の流さぬれ
 更成らぬ物以遂お己がゆゑ罵狂ひて細られ牽れてあを來る程お又著者演は撞見て

思ひも抑留られ昨夜のほど小正三が告ぐる折に悔くも熱湯ふ舌を焦せうへ猶
 且醋も喫む心地う素より頼の癖者れども人と生れて本然の善るはあも
 且恥て頭を擡げ既ぬと著者演の慈善の心始終違ひ今その悪更をせぬとて
 りと露さき還て柳より誘へてその線線を探ひ呆るも不慙愧して且感し且怒る
 のことよもつる登時著者演の故意目四郎を脱て這白物奴が年の長ても悪
 心と改めぬ終途を遭ふるともさうな奴も母のさうゆゑに這圓の極め
 さるる胆意を納易て入るる後音不可惜頭と喪れ心とをせぬとてこれに僅か
 その意を悟り目四郎の稍頭と擡て家公允さぬの重々一洪因心とをせぬとて
 責て佐と慎まひん恨入てゆゑのふゆとと著者演の又衆人おち對ひて和談の一條の
 甲斐ありとて著者演の治りたる教びを信じて前中も既おゆとて那奴が債の金の
 折らち推せぬ不盤盤の價を揣て贖ん置俺宿所訪れりその折金子を遮と志しと

ふも感さる姿鏡屋の主人のれを夢あまのそのあふ及ぶ色を鬻ぎ情を賣りて生
活かまねる妓院あはるのありてあり況世上隠れも大人の高義の差をててふ
損益を論じた贖のの思意あるねも皆共侶の宿所を送らぬとあまの
娼賈柄の憚りあれは這里を別れしを禮と元一のいれを受て答の美し辯は女才也
る竹の節たてよ和談の口誼を小正二も及その餘のもの共侶の嘆賞と姿鏡屋の
家公寔の介へ快罷れんとそりて合共著演の告別は後者と辞すり勞を
却目四郎をそつ戻ふこと還る花水橋の草草も遊里に推し連立ててのたけは
著演を自送と既遠くより又目四郎うち對ひてふふひも似せけるは島
許の白物をの刃の飢渴の堪難て身を投んとあひたといひ虚言の奸智の長うごま
るも十四五金の債ある妓樓の登りて一両の金と怨と遠くさへ最思慮の所なる
是より夏も惹出と竟の縲絏の及びいこの俺を欺たる報いとあつ恨もあつとぞゆ

俺の憐みて重て汝と極めさし事情を知りて後もむの具小説示さん俺料の由
這里あつて汝が昨夜の為体とつて及びて悔ひの二両の金の惜み足らぬと他が縲
絏の折で件の金を救取せし中とそが那金を取せし他とて債ある青樓の
登りて他が妓院を鬧と細られて牽らるる折より起すも極めさし
非と補ふ據のありととあひ上のあれはこの一條のさるる月詔ぬれの宿所へ来
とのそり立て藤澤小澤の程も目四郎の今初て夢の覺るごとく洪思徳義の
感服して何容々々と従ひたり却説野上稗有演の跡で宿所へ還着て且従者を休
せ極可の奴婢們が吟吟て目四郎と玄關の次の編室へ召階さして早飯を啖へると
まる程その身は齒小退はて頃之と又出て来り却目四郎に對ひての客の御小水詔
ぬれありといひ別のあふあふの汝が倒れ折俺従者小介抱さして茶を飲せん
とてける小齒を嚙締て受まうれば刀の挿方銅弁をて聊口を用うたる絆は紛まう



有像第士二



川土のを山ゆちちや
 花水橋悪木遇春
 送ぬ七乃名丁七春原是

目四郎

こもく 竊聞せし。その比底倉を敷き居る。脇屋少將義隆の家臣也。他們が子とて
 携来する。小六と云ふ。総角のまの義隆が子なり。その時具小六の徳而件は病人
 爲得諄々と送言と。袂の包に短刀と巻軸を。而三種妻小示して。これ死す小六殿
 俱と藤澤へ赴け。那御小隠れも野上吏著演の少り。時義と結ばた係
 異姓の兄弟多きと。左も右もと養れん。の餘のまの徳々との声細りて。苦は小字め
 措ち一封の筒を取。と遞せし。妻の頻りふらむ。口説立る哀傷悲歎
 竊に隨ふ氣を滅入と。竊心も且の耗て忙然と折外面人の足音と。其の来
 めの掩親を看。着られと。東も西も。おのれを。追て親品の宿。遠く
 本意を。那旅客の。つら。左も右も。思惟。巻軸の脇屋の系圖。又短刀の菊
 一文字と。名ける重宝。又一種。何多ありけん。を。袂に掩れて。足さ。け。知。り。ま。り
 れ。巻軸と短刀の。新田の餘類の證據。那落人們を鎌倉。許。稟。さ。る。も。儒。さ。る。

許すの賞錢を賜ふ。あつたれ。も。俺親の宿。只今。許。て。い。ろ。親。も。亦。落。人。を。苗
 措。たる。出。し。受。入。然。て。外。聞。妙。を。且。藤。澤。へ。遣。て。介。後。許。す。下。と。尋。思。を
 多。見。過。と。婢。の。便宜。を。現。い。小。那。病人。の。館。大。英。直。と。喚。れ。の。多。幾。程。も。ぬ。く
 多。ま。つ。た。れ。も。妻。の。母。屋。を。え。ん。小。六。と。俱。ま。柩。を。成。と。大。人。を。馮。て。這。御。へ。來。け。は
 婢。の。趣。も。又。英。直。の。柩。を。遊。行。寺。へ。と。丁。寧。に。葬。す。ま。り。為。体。の。送。り。ま。つ。た。り。

其の時小六のせん。と。あ。つ。た。れ。も。親。品。の。告。て。竊。の。相。譚。ひ。小。親。品。で。從。ひ。和。主。の。も
 多。志。俺。們。の。博。徒。で。も。人。の。使。者。と。い。ふ。を。這。身。の。榮。小。志。多。小。此。の。賞。錢。を。求。む。を
 海道一の使着る。野上の翁。其。落。人。們。と。有。一。罪。多。の。害。を。世。の。豪。傑。の。疎。る
 べ。然。も。和。主。の。賞。錢。の。徳。し。ゆ。許。ん。と。あ。つ。た。れ。も。禁。め。を。ね。げ。す。る。親。計。を。除。く。乾。父。乾
 兒。の。好。を。離。れ。て。六。御。以。西。貌。姑。峯。よ。東。で。飯。の。啖。せ。ぬ。後。悔。ま。と。穿。れ。て。その。衣。を
 以。單。の。衣。這。親。品。の。臺。町。宅。猪。子。太。と。喚。れ。る。豪。傑。で。い。ひ。小。惜。む。一。年。來。強。飲。小

脾胃を破れ。吐血を身まらした。然程に親肝八も。次の年の夏五月時疫を犯す。病と絶ふ。旬あまの醫師も半分を傳ひけ。只堂を返すが如く劇をうりて世を去り。その病中、小里人們の俺二親の勘當の賄話と。這身を召ひ、これ親の経営せし活業を嗣て主人よりこれも持崩せし。又も、終の浮き心を改め、僅に二稔たるの程、小宅も庫も沽却し、裏家住ひのち中を母親も亦去らうける。その初七日、藻湖草摺集め、も数多る。ぬ家材を送る。敗鐵經紀の售る。錢は月米の房錢の債。屋主も推苗れて勘當の合、合字號の質牌。借屋の柱の置土産。残る四十七文の假名川を立退りし。鎌倉金澤いへ。大磯小田原。親姑峰の湯本。這果半年。那里の三月同氣同病相憐む。友も。生活もせむ。閉鎖の浮世。直は。五六稔。あま。慈而今茲相摸る。底倉人。身を寓せて。兩月。あま。程。あま。日。閉鎖。利。失。ひ。債。と。賄。ふ。術。を。竊。心。の。復。起。と。考。進。退。を。考。折。多。相。摸。の。眼。代。藤。白。隼。入。

正安同主の湯治の暇を賜て。底倉の浴室。あま。民の膏腴を絞る。富る。任せ。酒。宣。女。遊。真。采。邑。る。れ。由。ゆ。ま。り。の。で。那。里。は。潜。入。の。山。獵。造。化。の。宜。か。えと計校する。準備。と。夜。の。紛。れ。件。の。旅。館。の。潜。近。の。垣。と。踰。窓。より。入。り。安。同。主。の臥房。小。赴。に。却。彼。此。と。檢。撈。る。竊。偷。の。熟。き。る。悲。し。の。あ。ま。の。度。を。喪。ひ。て。備。臥。る。壁。を。穿。つ。足。を。踏。み。小。踏。の。忽。地。覺。て。吐。嗟。と。叫。び。声。の。放。馬。く。安。同。主。偷。見。入。り。呼ぶ。と。岸。破。と。起。て。引。組。む。遮。莫。在。下。の。小。脅。力。の。相。撲。の。聊。嗜。り。左。右。多。く。組。む。伏られ。且。且。挑。争。の。程。小。駭。覺。る。近。習。の。侍。紙。燭。を。棄。て。西。三。名。を。次。の。間。より。走。り。來。て。主。を。援。け。在。下。を。敷。倒。し。壓。累。と。矢。庭。の。繩。を。切。れ。る。係。て。柴。薪。新。場。の。敷。糸。を。成。卒。二。名。側。を。去。り。左。右。の。程。は。天。の。明。く。今。の。名。斬。ら。れ。ぬ。ら。ん。と。思。へ。生。る。心。地。せ。後。悔。の。外。き。り。小。果。と。庭。の。牽。出。され。て。命。俟。回。の。厨。下。の。灰。幸。ひ。を。ひ。ま。て。世。の。真。實。成。今。俺。身。ひ。ち。摘。て。疼。痛。を。知。ら。れ。浩。処。小。安。同。主。の。多。う。う。刀。を。引。提。ぐ。坐。席。の。縁。

頼の出て来り。雑兵們の是を以て在下と牽立て。主の身邊に推居し。安同主熟
 視て。汝の原は何里のもの。姓名宿所も具し。稟せ。快くもせ。のふ。と向けて在下
 跪き。在下の目四郎と喚れる。一所不住の博徒。近曾のちも。續して。造化の術
 彼中も此中も。異なる。債の苦。ゆれて。せ。方の。随。初。夜。拵。熟。技。を。鑑
 一文の。忽。地。生。拘。れ。後。悔。腑。を。噬。む。と。俺。も。恨。む。の。昔。悪。と。い。ひ。の
 び。只。死。慈。悲。を。願。い。け。れ。喞。言。か。す。く。陳。せ。安。同。主。領。て。以。ふ。優。と。い。ひ。の
 量。武。藝。も。習。ひ。し。り。と。が。本。夏。の。昨。夜。れ。と。知。れ。り。領。主。の。旅。館。憚。り。も。ま。く。潜。び
 入り。大。胆。不。敵。免。ま。た。奴。も。な。も。胆。鬼。見。と。も。あり。今。も。俺。の。後。一。箇。の。功。を。立
 ん。と。あ。命。を。助。る。の。も。必。重。用。の。胸。を。定。め。上。成。せ。と。い。ひ。て。在下。怡。悦。堪。は。ら
 何。の。ふ。い。や。らん。あ。い。け。き。と。い。ひ。今。斬。ら。ん。這。首。を。續。き。御。恩。預。り。非。如。水。火。の。中。に
 と。辨。ま。さ。く。命。の。勉。で。功。を。立。た。し。快。々。仰。付。り。と。辨。を。放。ち。諾。ひ。安

同。主。合。合。大。々。々。雑。兵。們。の。云。云。と。下。知。と。馳。て。在下。の。繩。を。解。し。召。登。し。と。飯。を。賜。り
 酒。も。飲。み。七。更。の。閑。室。未。召。近。つ。け。密。中。の。い。ろ。ろ。俺。の。年。來。の。怨。敵。あり。此。は。是
 藤。澤。の。御。士。野。上。著。演。の。縁。故。の。箇。様。々。々。と。那人。二。度。迄。お。身。の。為。の。恥。辱。を
 攬。り。癖。の。趣。せ。還。も。説。示。と。相。摸。へ。今。俺。が。配。下。れ。ば。那。奴。の。由。緒。を。舊。家
 へ。自由。未。だ。死。所。あり。其。の。故。怨。と。隠。々。空。小。光。明。と。過。せ。し。圖。ら。ば。も。癖。に。用。ある。汝
 の。つ。て。を。救。ひ。る。れ。汝。那。里。の。赴。は。て。段。と。以。著。演。が。寝。首。を。捕。て。俺。の。名。を。賞。禄。を
 望。み。仕。せ。し。こ。が。腹。心。の。家。隸。を。あ。わ。ね。と。某。門。の。事。を。行。せ。て。做。損。を。と。あり。も。せ。俺
 出。宗。を。免。れ。な。ら。ぬ。故。不。汝。は。未。女。を。い。は。し。信。義。を。と。せ。と。い。ひ。て。在下。沈。吟。し。仰。け。り。外
 と。も。那。著。演。の。武。藝。の。達人。を。い。は。し。後。類。多。く。然。る。と。在下。單。身。也。本。意。を。遂。げ
 正。目。勿。ろ。べ。く。彼。れ。の。優。て。短。る。奇。々。妙。々。の。一。談。あり。と。い。ふ。安。同。主。膝。を。拭。き。て。そ。の
 亦。甚。麻。呂。の。妙。計。と。向。けて。在下。此。の。擬。議。を。殿。の。知。せ。と。い。ひ。著。演。の。養。嗣。と。い。ひ。

ころよびる。あつねん。またとのうちち。脇屋義隆の妻子。在下故郷。在り。時
小六と呼做。少年。日。義隆殿の討捕。脇屋義隆の妻子。在下故郷。在り。時
故ある。あつねん。その顛末。箇様々。と。今より九十年。日前。假名川。親肝。宿
也。義直。その妻。母屋。送言。老。緯。系。圖。の。巻。軸。菊。一。文。字。の。短。刀。の。目。ま。を。
詳。し。且。此。生。且。その比。在下。鎌倉。訴。ま。う。さん。と。い。ひ。か。も。猪。天。と。い。ひ。親。品。の。諫。め。ま。を。
黙。止。ら。ま。の。義。と。以。管。領。さ。る。告。訴。ま。の。の。あ。る。著。演。親。子。の。捕。捕。ら。れ。縛。首。城。
削。ら。る。這。義。へ。い。と。真。実。さ。る。密。談。數。刻。及。び。い。の。安。同。王。愛。ら。る。あ。り。て。彼。と。大。
か。さ。る。原。来。野。上。著。演。奴。の。年。来。新。甲。荷。擔。し。上。に。萬。考。野。心。顛。然。の。義。を。
告。訴。ま。う。ん。の。罪。ま。れ。る。疑。ひ。を。雖。然。之。の。拒。障。あり。俺。身。今。鎌。倉。在。在。れ。速。水。
告。訴。ま。う。一。是。一。の。拒。障。之。前。月。湯。治。の。願。い。より。五。十。日。の。暇。を。賜。り。し。ま。す。三。十。日。あ。り。
追。ま。と。鎌。倉。へ。還。り。び。ど。り。是。二。の。拒。障。持。氏。公。近。比。京。都。將。軍。と。御。不。和。か。く。
竊。小。獨。立。の。御。宿。意。あ。り。より。新。田。楠。の。餘。類。と。い。ふ。も。先。非。之。改。之。從。ひ。ま。る。恩。免。の。

の。往。々。これ。の。信。が。今。汝。と。も。鎌。倉。遣。と。藤。澤。の。御。士。野。上。著。演。の。竊。小。脇。屋。
義。隆。の。子。と。金。品。藏。で。養。嗣。か。と。い。ふ。具。訴。稟。ま。と。正。に。證。据。あ。る。あ。ら。む。と。為。疑。
と。て。遲。滞。せ。ん。是。之。の。拒。障。と。い。ふ。の。障。礙。と。釋。せ。ら。れ。汝。那。宅。小。潛。ひ。入。て。小。六。を。
持。做。と。那。巻。軸。と。短。刀。と。奪。取。せ。し。證。据。不。し。許。さ。る。著。演。親。子。の。立。地。の。樹。
捕。ら。る。れ。ども。人。の。名。を。取。秘。書。宝。刀。を。竊。取。る。と。い。ふ。心。を。盡。す。も。あ。ら。む。入。る。と。
亦。復。算。し。手段。不。切。て。著。演。が。う。前。先。或。は。刀。子。刀。并。ま。れ。竊。取。ら。れ。縛。成。さ。し。れ。
將。他。が。所。藏。と。い。ふ。目。識。あ。ら。む。妙。と。の。東。西。既。小。の。入。ら。ば。汝。鎌。倉。へ。て。ま。あ。り。却。
訴。稟。ま。う。野。上。著。演。の。年。来。逆。謀。の。人。也。然。る。あ。り。九。年。之。前。脇。屋。
義。隆。の。子。と。金。品。藏。で。小。六。と。名。を。取。て。養。嗣。か。と。い。ふ。其。初。の。義。を。知。ら。近。曾。那。著。
演。と。象。棋。の。席。小。直。會。せ。し。交。り。浅。く。ま。る。信。而。其。の。著。演。が。竊。取。其。本。を。
招。て。譚。ひ。の。俺。管。領。家。と。討。滅。と。義。隆。の。子。小。六。と。鎌。倉。の。主。せ。ま。く。欲。和。

殿の射藝銃銃の達人でもなれぬ盗賊の鎌倉小赴と管領家の死外出の折と現ひ
 狙撃して素懐と遂にその命。只一人の命を以て數百騎の將を撃つるの矢砲飛劍の
 優りあり。這う筋前刀并の俺家の重宝則和殿小まらざる。是れとて管領家と敵を
 捕めと其の件を武器贈り。否とあつた座を去るに敵軍東を西面愈の勢並で
 だえ一六陽炎一味の如く心で那里と望とを伏し注進の爲參上せりと実事も訴
 稟しと竊取するう筋前刀并の刃子刀并を解の證據とてとまらざる時と殺さる者
 演が宿所へ討も向られて那身のゆゑ圍宅の奴們一個も漏さず捕られて必獄舎の
 敷られし程も俺も亦鎌倉小還りまらざる詮議の席小列とてその折著者演克柱
 るととつてつる小陳まらざる俺亦智略を旋らして那奴小頭と喰せまらざる隨小稟做
 して叛逆の罪を定むる竟小三旗を夷はれて宿怨其死果まらざる愉快にや
 らまらざる勿論は忠許の功と上より賞錢を賜らる俺も亦錢帛を盡して卒其錢

取まらざる。駝馬小荷の捷大役を念と支と做損まらざる。其は示と金十兩を
 取り出し。是の計議の雜費と紙小粘りて財けれ在下獄を受戴して仰あるは必
 做課せしむる左右と俵せぬと。言葉兼と旅舎小退と且身皮と繕ひ却平
 塚を相識許赴して逗留。夜も日も這頭と徘徊と大人の宿所を張と既なる必
 一句許潜ひ今んと欲せかとも内外の用心堅固と音小便りとる。他約の折を
 現ひて刀子をれ刀并を竊んぬと機と易方。是より夜毎小暇われ。聞鈔と耽と
 件の金と幾三夜を失ひぬ然と己にばる。昨日朝よりあふまらざる大人の他約
 登く小鯉星月花水橋小倒れて俵の豫の計校病者ととせと齒と噬締で介抱せらる
 時不及で銅并とて口と用れらる。造化手通魔使との折まらざる銅并と偷
 竊さる。信而癩痲さる。由も飢渴と逼ると身と投んと欲せらる。母小実まらざる
 られ。長者の教訓金二兩と賜り。一噂と違ひぬ慈悲善根天を考らる。受て

別れてつくと尋思し曾て定め難てあるも身を又求め只一つこの遭際也銅算を
 の窟竊するを鎌倉の安同主のれど許ん正勿論るれも野上の翁を仇
 とも知らず憐愍深く這金と本錢をせよと養られ恩を叛く猪三太のれど
 友人の夥計を除くとのひめせんを以て鎌倉罪を免れ然りと藤白殿
 の一日命を助けられ雜費せよと十兩の金を賜りたりしが今何れも易志も
 志のくせましと胸のなや當りゆき尋思せし又究竟の段あり俺造化のよ
 時紅粉坂ある安鏡屋の紅毫許屋を以て借方洞房錢多くあり這一兩の金
 那里より得て恁と必これ彼と論きて古借を債られその折甚く罵狂の那里の奴
 們己と必これ必これと細めて鎌倉赴きて憲助を以て恁と同は所の詮
 議及びひでつ所持する一兩の金の出処を問はん時件の金藤澤の野上某演養
 乃那著演の箇様々とある至て藤白殿のれど立て証て叛逆のより成

真言の言不用意お少くは似て野上の翁の思ふも叛を藤白殿に頼れ密謀立地
 成就然と然と安鏡屋の許の外よりて掛て牽れ俺が細をも釋るのさ
 逆徒を告訴の抽賞ふ東西許り賜るべし便是一事兩全これ優る手段あり
 と深念の腑を固めより紅粉坂は赴きて形を計ひい豈思ん今朝も亦花水
 橋の頭で仇多く大人を撞見てゆき恩義を受んと素より大人の仗氣を世の風声
 ぞ知るといふ飽きて仁義の富むる至善の長者の御座せよ這身の不肖といひ
 薄情や會更不相譚れて无実の罪を陥えと伎倆所仍を悔けれ今俺身
 恨むも甲斐多切て大人を懺悔七左も右もさすやと以て小なれ阿容々と俱せられ
 ありまありの親も不孝他あり不実の罪を免ぬ放蕩を頼三十餘年の非を知り只
 是大人の高義大徳人の及び誠心感服せしよと恁れ大人のみ善知識を
 とも先にも恩義の報ん術も今目前身を殺してつよの詭譎をぬと知せまらん

允させぬとの果て速く身を起し柱を觸れ頭を碎けて死なせし。著演透きま
 呼林示也やや等目四郎短慮の功を。おまわり心を鎮めて坐臥返れ性急の辱を制
 まれば目四郎僅少なうとてその死ねも死なれどとの声口隠る感激の目と屋簷一滴
 誠の袖を露れて找難々平伏さ著演頻り不歎息して又目四郎と呼近つ四下を
 足らぬとも敷馬をよひ小六がうへ。他の脇屋中將の死子ありと云ふも。けふを俺の知らざ
 足らぬとも敷馬をよひ小六がうへ。他の脇屋中將の死子ありと云ふも。けふを俺の知らざ
 足らぬとも敷馬をよひ小六がうへ。他の脇屋中將の死子ありと云ふも。けふを俺の知らざ
 足らぬとも敷馬をよひ小六がうへ。他の脇屋中將の死子ありと云ふも。けふを俺の知らざ
 足らぬとも敷馬をよひ小六がうへ。他の脇屋中將の死子ありと云ふも。けふを俺の知らざ

小六が素生と安同不知れたる。今らうら復た難免之難波が管領家上
 一と訴まうさばも安同歸府共告許と俺三族を滅さんと計らるる。おれも亦時
 る命を命を辭す。おれも亦時。小六を俱に罪きて。年来盡せ。志の空花とる。おれ
 いかに也。他則英直が獨子。俺身と共死す。時運と諦めて思ひ絶る。堪も也。
 脇屋殿の死子。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。
 勢の国司北島左中將親能卿の父祖の時。南帝の外戚。望重り。南北兩朝。死
 和睦の後。足利家。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。
 ありと。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。おれも亦時。

え。う。ひ。ひ。め。と。あ。ね。ち。と。さ。あ。ゆ。り。う。ま。と。ま。こ。ろ。の。あ。か。し。と。胸。の。秘。事。を。ち。諦。て。と。千。寧。小。説。示。せ。目。四。郎。を。て。執。て。そ。の。と。易。足。御。用。非。如。異。国。の。盡。死。も。令。郎。の。お。伴。と。せ。口。ホ。を。分。ち。切。せ。の。報。恩。謝。真。心。の。首。途。の。目。の。定。り。を。指。揮。を。願。ふ。の。ゆ。え。著。者。演。領。を。令。郎。の。平。塚。の。宿。に。退。了。便。と。等。小。六。の。認。り。と。同。目。四。郎。の。事。を。小。六。の。目。に。被。さ。し。那。藤。白。密。談。と。も。さ。の。事。も。這。里。の。内。外。を。張。濟。せ。し。る。れ。お。容。貌。さ。し。声。音。さ。の。と。よ。認。り。と。易。長。夜。中。の。徳。の。い。た。ま。著。者。演。又。領。て。懐。ろ。鼻。紙。刺。の。思。具。袋。を。ち。用。て。有。つ。は。金。之。函。を。取。出。し。目。四。郎。小。六。と。示。さ。し。汝。且。這。金。を。も。笠。脚。絆。腰。刀。兩。衣。も。買。敷。て。旅。装。と。小。六。を。俟。ね。時。日。の。暮。し。下。し。さ。そ。ち。又。後。不。知。る。べ。快。々。立。れ。と。急。せ。目。四。郎。の。件。の。金。を。戴。り。收。め。後。日。契。正。と。告。別。し。平。塚。を。旅。舎。を。投。ぎ。退。り。け。り。

第十回 相摸川小六横死を二示す 遊行寺に著演頼吟を葬る

たのころ。このあそびの。と。疾。起。ぬ。ひ。の。ま。は。が。く。く。と。う。さ。げ。さ。て。あ。の。お。館。小。六。も。這。朝。例。の。と。く。疾。起。ぬ。奴。婢。之。助。小。六。の。句。讀。を。授。果。一。比。養。父。著。演。が。梅。澤。より。の。と。各。還。の。来。あ。け。れ。遠。く。出。迎。て。恙。を。祝。い。路。の。疲。勞。を。尚。慰。め。俱。不。早。飯。を。食。け。り。著。演。の。客。あ。る。を。せ。り。著。を。問。て。又。去。関。の。う。ま。出。り。小。六。も。親。生。平。あ。わ。と。慌。し。を。訝。と。來。る。客。の。誰。か。ら。と。尋。ね。ら。し。ら。ち。出。て。よ。向。久。ま。さ。し。と。依。書。齋。を。退。け。小。六。も。胸。の。ち。騒。が。れ。何。と。き。鬱。結。れ。一。氣。を。吞。み。と。あ。ひ。つ。徐。々。庭。の。立。出。て。ひ。と。ら。彼。此。と。互。ま。離。合。の。縁。頼。の。頭。小。六。一。鬼。花。の。竹。離。色。も。真。白。あ。る。ま。さ。の。最。盛。り。を。け。れ。且。其。外。小。六。の。程。小。六。密。談。の。癖。の。趣。目。四。郎。が。懺。悔。の。忠。告。及。著。演。が。答。一。言。の。首。より。尾。まで。圖。ら。む。感。果。て。或。の。驚。死。或。の。憂。ひ。て。竊。小。書。齋。へ。退。つ。獨。就。思。考。す。那。目。四。郎。を。え。ん。の。鳥。許。の。癖。者。小。六。奇。情。杭。の。取。り。う。る。る。大。人。の。慈。善。不。感。悟。と。鳩。毒。還。て。良。茶。小。六。も。至。誠。の。致。を。所。今。子。を。ゆ。め。と。さ。大。人。の。徳。と。有。り。然。る。也。去。歳。の。秋。ま。俺。ま。知。り。ま。り。け。俺。身。の。素。生。目。四。郎。を。知。ら。ま。

たれも世の浅きで。あふ九年の光陰を。麻老親の仇を。安同の告げたる鬼神でも。前知
 去る死時節到来。竟る脱れぬ枉屈神の祟を。今ゆくのせし。遮莫俺身の故。大恩受
 養父母の罪を。れんぞ知る。自亦何処へ。立退く。然とて。俱小半。束ねて。討兵の
 為に捕れて。親子齊一死の益。所詮。夏の破れぬ。先小那底倉。安同。旅館。獨潛
 入て。度盡ふ。做る。鎌倉武士。中も。京家。小も。安同。と。俺が。素生。と。知り。る。の。の。ある。こ。る
 けれ。禍頓。消滅。と。養家。恙。る。所。然。も。那奴。実父。の。雙。足。折。る。果。し。て
 先考。亞將。の。靈。と。い。の。慰。め。を。う。ん。と。必。決。め。て。あ。の。け。る。も。亦。時。節。到。来。の。本。意。を
 遂。さ。ん。嬉。し。く。あ。ら。わ。れ。る。の。終。也。那。安。同。を。撃。つ。所。為。る。人。小。知。ら。ま。せ。ん。術。の。ま。ま。と。腹。小。回。ひ。肚。小
 養家。小。及。べ。俺。が。祈。り。ま。さ。せ。世。の。人。小。知。ら。ま。せ。ん。術。の。ま。ま。と。腹。小。回。ひ。肚。小
 竹。登。時。程。を。謀。慮。を。凝。り。ま。才。子。の。憶。影。を。な。く。し。と。あ。ら。わ。れ。死。計。を。ま。り。と。夜
 竊。小。起。出。て。牆。と。踰。敷。と。潛。り。と。相。摸。川。の。邊。小。赴。た。彼。此。と。見。且。ま。小。頃。の。首。の。聲。小。々。

月の中流のゆらけ。若葉小夏雲の遠山の迎梅。雨の水倍。と流れの特小の速。又只。這
 方の岸邊。竹枝。數幾。町。秋。鼓。立。て。陸。も。水。も。分。が。死。と。五。六。間。伐。放。た。野。渡。の。船
 場。小。老。り。這。頭。へ。總。て。人。煙。稀。も。路。津。高。師。の。孤。屋。あ。る。も。を。檐。下。も。河。原。も
 重。二。三。十。可。る。葛。石。幾。箇。も。あり。船。俣。人。の。立。疲。を。尻。を。掛。き。ん。為。る。と。小。六。を
 其。頭。と。得。と。と。軀。を。宿。所。か。り。あ。ら。舊。所。より。潛。入。て。その。身。の。臥。房。小。赴。程。小。遊
 行。寺。の。鐘。音。つ。あ。を。雪。漏。き。と。と。儂。れ。短。夜。を。く。尚。四。更。も。小。六。も。倦。て。も。枕。小
 就。を。甲。夜。より。准。備。あ。ら。け。袂。包。と。又。庭。へ。と。出。り。樹。下。も。石。燈。籠。の。内。小。隠。と
 燈。籠。の。小。障。子。と。故。の。ご。小。建。え。の。れ。を。知。る。の。ま。り。け。り。看。官。這。袂。包。の。内。中。も。何
 ら。の。東。西。と。と。尋。る。小。菊。一。文。字。の。短。刀。と。那。系。圖。の。巻。軸。と。金。五。十。兩。も。あ。り。這。目
 小。六。が。必。ず。英。直。夫。婦。の。正。首。小。守。り。と。俺。身。小。傳。授。け。父。の。送。金。の。を。終。也。二。百
 兩。あ。る。れ。今。より。後。俺。が。盤。纏。の。医。の。あ。ら。飲。れ。と。備。底。倉。を。戰。殺。其。那。揚。州。を

鶴小騎十萬貫を腰に巻くとも亦何の益ありの任はれり遺り留めての事と
 養父母の贈りたるもの年来艱苦の雜費の十之三二も贖ふ寸志とありきや
 金の盤纏の要ると尋思ひて形のごとく那二包の金と之箇ふ分ちて百五十兩と字
 紙の包み替の如く衣箱の底に藏へて送し措く間話休題却説小六と其の詰
 朝生平のあど起ても山を穿つるの如く人の名と声高き小呼び立ち或の罵り
 うら笑ひ或の歌ひうち歎く千態萬狀限りも置く立てろ又うち臥して連る狂
 騷しゆ奴婢們的駭に呆惑ふ主人夫婦不報く著演晚稻も亦故馬を共
 侶小走の末ち吐りとも諭し小六と其の鎮は死親子の分別る死ど著演晚
 稻と疾視嗜りての罵り狂ひを痛痛は為体全く乱心と云え一晩稲を怕
 ると身邊へ寄り著演ととも見物せられ猛可小醫醫師を招き容体と正見
 療治と請ひ小六を醫醫師を寄せ着せ又甚く罵りし和解て脈と診んと

売れども小と七と把り矢庭小醫醫師と突倒し登り根を刺立の頭三四
 捷し小醫醫師の吐嗟と叫び辛くと逃退れと著演別室お伴り詰詰と藥
 劑と請れ小醫醫師の百會小唾と塗り衣領擦合苦笑し七賢息の病体は是
 乱心小疑ひる倘狐の憑る櫛とて熏り小狐妖頭と總て箇様の難
 病の良醫といふも即效と奏すがたの氣と然と治せまとのあわむ只看病を
 專要されあり賢息の幼年と書讀書小氣を屈しあや故ふりやゆらん痾
 症の人年久しく心と勞まれ這病ありあれを用ひて試めと密中お醫醫師を演湯
 液五貼調合せしと遞与しと躬く出て見たり然とも小六を湯液を飲ませ強薦ん
 と欲まれ拂退け皆うち際して醫醫療徒事ありし著演深くうち歎て録倉
 る名僧驗者お祈禱を請ひ加持と求めて心と盡きぬるもされ小六を夜も日も馬
 狂ひてままれ外面走り出んとけり看病の僮僕們辛くと捉禁め横うち被

せく 壓鎮めりも幾番とあるを。あはれ故小著演の日夜看病の人増とてその身も
 務と廢る道に回る時々看よりけり左右程のち五六月経ければ小六が狂乱
 稍鎮之飯と啖と數枕不及著演晚稻の爲に聊安堵の事と做し
 病苦の可不可と次り小六を絶て心せむ終著と投捨て仰てて臥し高
 軒と久し覺を悟而這日暮小六も熟睡と快氣をとり是則加
 持祈禱の法驗より成りあんとて二親の飲ひいけり看病の奴婢們相賀と憐
 ると申すねどもあはれ五六夜の程の睡るを泊り一宵の静まるれを更もく
 随ふがむも各々睡眠と催しと四睡の虎あねども或は猫見と膝の骨に或は背と
 ろち合と寂然と目睡けり小六をえ済と竊お起り縁頼る戸尻成用き
 庭にお出り夜石燈籠の内の隠措けり袂包と出と腰に附け足と後門に
 赴て鎖探ぬて戸を蹴用西と投をまけり登時看病あり奴婢們小六が

後門を蹴開く音小驚覺て臥籠をさす小六をば杖の脱出をみけり赶上
 よと罵騷く諸声小著演も晚稻奴婢之助も起てあつと安て看病の急を
 外に死眼さるる周章と著演急小推鎮めて蓋を空敷蓋時のを根らん俺が門
 前より東西の岐路特小多る部と定めて趕留め誰々の西の方又誰々の東の方
 蕉火を走る便を。食挑灯と推考とあつる快物と自取も烈に主命誰
 う此も擬議と死業のぬと心も果然とあつる挑燈と片小引提り裳を引折り
 草鞋と穿も穿ぬあり十名あまりの家僕們老僕小斯小至るも數を盡し後
 門より走り出路と分ちて喘々を趕さけ然程小の夜小六を故意と後門を
 扉を推開き西を投て走る既一里あり相模川の頭迄今を二十町
 なるもあつると急折る忽地後方小人音と趕鬼とる兩個の若黨字六画
 七と喚ゆる存一声とあつる立てそま令郎とる留めと呼と呼掛透るを



志趕近着おひつりつ。小六こくろく。信まことと云ふ。原もと來きた追お入いの道みちり。俺おれが九く才さいの時とき。夢ゆめ不な醒さの趣おもむき
 似に。あつた。此こゝ。微ち。感かん。さ。ま。の。倒たふ。ふ。足あし。多おほ。量りやう。緑りよく。あ。わ。ん。ぞ。う。ん。魚い。へ。垂た。妻ま。時とき。停と。在あ。て。留と。ん。と。近ちか
 づ。字あ。六む。腕うで。と。右みぎ。手て。を。引ひ。肩かた。被か。け。行ゆ。才さい。と。打う。と。投な。げ。修しゆ。煉れん。の。卷まき。法はふ。小こ。魂たま。滅めつ
 依よ。ぞ。苦くる。と。叫こゑ。び。声こゑ。を。怯おそ。ま。進ま。む。画え。七しち。を。左ひだり。受う。て。足あし。を。飛と。べ。と。礮げ。と。蹴け。る。蹴け。られ。く
 画え。七しち。も。云い。と。た。ろ。ふ。胸むね。を。反さか。して。倒たふ。れ。ろ。小こ。六ろく。を。これ。を。も。か。へ。志こゝろ。河か。原はら。を。投な。げ。て。走は。り。ゆ。影かげ。の
 限かぎ。を。夜よ。中ちゆう。の。月つき。ふ。え。て。も。讀よ。み。ぬ。一ひと。文ぶん。不ふ。通つう。の。字あ。六む。を。膝ひざ。に。ま。か。し。て。立た。ま。す。ま。れ。猶なほ。痛いた。む
 小こ。の。歌うた。画え。の。何なに。曾ぞう。々々。ふ。似に。画え。七しち。も。夏なつ。山やま。の。腰こし。を。抜ぬ。け。と。野の。邊へ。不な。政せい。不ふ。能な。も。兩りやう。樹じゆ。の。坐ま
 行ゆ。松まつ。政せい。も。も。不な。令れい。郎らう。あ。の。喃なん。々々。と。呼よ。び。被か。け。声こゑ。を。噎おど。と。拵ぢ。れ。た。ろ。然しか。程ほど。小こ。六ろく。を。又また
 只ただ。管くだ。小こ。走は。る。程ほど。は。既すで。に。七しち。相あ。撞つ。川がわ。の。頭かぶ。を。も。ま。よ。け。れ。這こ。路ろ。津つ。場ば。多おほ。尻しり。横よこ。石いし。の。重おも
 二ふた。三さん。十じゆ。竹たけ。も。あ。る。と。い。ふ。も。輕かろ。け。小こ。撥は。抱か。で。岸かた。小こ。敷し。糸いと。に。渡わた。船ふね。小こ。因い。り。と。無な。件けん。の。石いし。と。川がわ
 夾くわ。と。投な。げ。て。又また。引ひ。く。と。河か。原はら。を。竹たけ。敷し。密みつ。と。走は。り。入い。り。程ほど。は。所ところ。身み。を。潜ひそ。め。趕お。来きた。る。人ひと。の

形迹かたち。を。直ただ。く。這こ。里ろ。不な。規ぎ。ひ。り。浩こう。処じょ。不ふ。字あ。六む。画え。七しち。の。後のち。に。束むく。小こ。僮どう。僕ぼく。們ら。と。ち。連つ。立た。ま。す
 趕お。来きた。る。者もの。皆みな。路ろ。津つ。場ば。不な。停と。立た。て。隈かた。を。り。ける。月つき。影かげ。は。又また。且かつ。去さ。限かぎ。り。彼あ。此こ。と。兩りやう。妻ま。時とき。眺なが
 め。却かえ。り。て。俺おれ。們ら。が。投な。げ。られ。る。那あの。里ところ。より。這こ。里ろ。不な。規ぎ。ひ。り。と。何なん。処じょ。に。あ。る。と。い。ふ。ん
 見み。よ。渡わた。船ふね。の。這こ。方かた。の。岸かた。小こ。敷し。糸いと。を。儘まま。あ。ま。れ。波なみ。濤たう。を。踏ふ。み。流なが。を。涉わた。る。仙せん。人ひと。も。あ。る。と。い。ふ
 志こゝろ。前まへ。面めん。赴むか。ひ。ぬ。ん。や。不ふ。思し。議ぎ。の。も。あ。る。と。い。ふ。衆しゆう。皆みな。皆みな。諸しよ。の。い。て。い。る。と。い。ふ。ま。ま。京きやう。京きやう
 志こゝろ。前まへ。面めん。赴むか。ひ。ぬ。ん。や。不ふ。思し。議ぎ。の。も。あ。る。と。い。ふ。衆しゆう。皆みな。皆みな。諸しよ。の。い。て。い。る。と。い。ふ。ま。ま。京きやう。京きやう
 ら。ん。然しか。と。も。軀かた。を。食く。共とも。侶りよ。不ふ。件けん。の。門かど。邊へ。不な。立た。ま。り。連つ。り。小こ。門かど。を。ち。敲たた。て。喃なん。此こ。の。を。向むか
 ま。ま。え。俺おれ。們ら。の。狂くる。人ひと。趕お。来きた。る。者もの。今いま。這こ。川がわ。を。西にし。の。く。渡わた。せ。り。の。い。あ。る。所ところ。は。な。や
 登のぼ。り。喃なん。々々。を。呼よ。び。覚さ。せ。裏うら。面めん。一ひと。声こゑ。と。竹たけ。と。吹ふ。き。頃とき。之これ。と。起た。ち。出で。て。戸かど。を。推お。し。開ひら。く。別わか。れ。人ひと。も。あ。る。と。い。ふ
 里さと。の。路ち。津つ。を。成な。る。公こう。前ぜん。人ひと。を。左ひだり。見み。右みぎ。を。各おの。々おの。回まわ。り。と。ま。り。夜よ。河か。の。渡わた。り。渡わた。り。渡わた。り。地方ちほう。の。法はふ。度ど。を
 犯とが。と。何なん。人ひと。の。前まへ。面めん。に。あ。り。日ひ。暮くれ。れ。て。より。自みづか。今いま。も。然しか。と。も。あ。る。と。い。ふ。回まわ。り。て。合あ。は。り。合あ。は。り。今いま

より此下先つる。俺門邊を慌ゆふ人の走る足音ききあつる。程も何事あり及
 水音の次とゆきて介後の里多るもあつた。各々不趕れる。その狂人へあまて来て
 身と投言ふわびや。あま衆比皆駭駭して。その大變多る。什麼何処より投て流
 沈まゆいけん。迹をなせ。皆来て下と罵る。字六画七們と共小路津高師さへ立出く水
 際もあつる。月光も不挑燈を照下添て。その隈を素に繫ぎ。船の内不庭草履片
 足りの。只これのまわると。船より船底まで濡す。水はひき乾き。這光景も衆評存一
 是則那阿人の庭より這里を穿りて来て脱捨られぬ疑ひ。さもこの不駭悼を
 つくとも。金惘然と早河の水を眺て。鶴立む程。著演も小六がりの心の居限りも
 各りれ。小廝挑燈点きと。晚縮と共。這路筋の長蛇影を。芋環の床をみる。尋
 来つ河原不評議を凝したる。衆人を足て。声高き。その字六画七們も。俺只顧

小六がりの心お掛りて堪られぬ。居る便りも俟んより出て。たむと必ひぬ。勤勉の
 妹子も。俱まとの。林示め。出ても人遭され。月明に夜も。子の。音の。間を。通り。あまて。来
 つる。お。よ。へ。晚縮も目と拭いて。や。や。字六画七們。よ。ま。小六。不。適。は。飲。と。向。く。夫婦。共
 侶も。走。り。近。着。る。衆。人。も。皆。心。を。ま。左。右。別。れて。立。迎。へ。る。中。の。字。六。画。七。進。を
 出腰と折めて。あま家公。暁うけて。奥さあ。の。と。を。遠。々。来。す。れ。ば。苦。難。の。ま。令。郎。の
 この。水。屑。と。ま。せ。ぬ。お。と。報。を。ま。婦。の。果。胸。を。潰。し。声。あ。り。て。お。を。汝。等。の。人。や
 知らぬ。放。ち。て。死。ま。さ。る。と。お。の。詳。不。告。よ。う。お。と。辞。せ。さ。く。向。れ。る。字。六。画。七。の。頭。を。撥。は。く。
 叱。せ。ぬ。お。路。次。の。始。末。を。知。ら。ぬ。お。故。小。を。俺。們。兩。名。の。ち。を。奪。へ。南。御。の。頭。を。令。
 郎。不。趕。着。ま。あ。り。推。留。ん。と。く。け。る。お。の。悍。地。と。夜。又。の。ご。撥。扱。を。し。着。て。右。と。左。二。間。の
 ま。り。弁。斗。と。拍。と。投。め。ひ。く。此。彼。俱。不。腰。を。扱。と。起。ん。と。せ。し。足。立。を。その。間。今。郎。の。這
 方。と。扱。て。直。走。り。お。走。り。て。足。を。折。り。ぬ。折。り。ぬ。烟。草。畔。藏。們。も。後。走。お。来。ま。し。け。れ。ぬ。お。報。苦

痛と忍びて共々趕鬼なり。這河原も多々たつて寂寥とて人影のなき因て這
 路津成る。公羽を連り呼起と箇様々々々夜河の渡を制度を前渡せ
 人のるれと今より此下先の程佳々のありけり。と報られ胸を騒がせて疑念の雲
 され。這公羽と相伴り。海河原と彼此と索ねまをせける。果と公羽のいへる違ひは是
 亦因せ船の内。今郎の脱捨を以て庭草履半佳又あり。又船より船底まで濡れし
 是入水の時。飛走水の楫をさうん。これらより今郎の既水屑まよりあひ決とあひ決
 ゆめゆと辞ひゆく。真実とを報せつけ六日の甘言蒲十日の甘菊さるる。晚縮
 と声立す。泣くを禁る著者演が泣ぬ泣ぬ増て千萬。登里の心の哀を亦方方ぬ
 りしとあひへて声高き。證跡分明るとと汝が推量の違ふはあねども然
 とてまを空く。とち眺めよとあある。縦小六を病病より。不覚入水とてとも
 年来習ゆる。泪水は枝ありぬ。萬一急流を凌ぎて前渡せ。後余ら

ても亡骸とて。涉傷とて空お已死や。這方の岸を竹藪のまはれ船の西の岸へ渡り
 索るる金と敦圍と路津高師の推禁めて。その宣まると。這早川の親姑山奉
 這方小類ヨヌ。ぬと急流をぬ。此の雨霖雨也。水皮毎十倍。船尚自由。遣なると然
 は。いんや申さ。佐々木梶原あり。も。漏洩を。ぬ。推流。瞬
 間。幾十里。流されぬ。疑ひ。と。著者演。余り。後々。送恨。人。為。那
 是。這。僮。僕。們。の。船。無。し。前。渡。案。内。と。索。れ。憑。り。央。賃。此。も。敷。つ。ど
 俺。野。上。吏。と。名。生。る。路。津。管。回。師。の。又。一。議。及。原。來。慈。悲。の。夢。藤。澤。の
 大人。で。甘。よ。ね。這。河。原。の。遠。く。及。南。御。の。地。頭。で。央。賃。を。あ。ん。や。食。快。乗。せ。ぬ
 ね。と。小。衆。皆。あ。り。て。主。人。夫。婦。が。お。て。来。る。小。廝。も。俱。々。散。動。々。と。齊。一。松。小。乗。路
 津。高。師。の。鏡。を。解。け。掉。と。操。之。辛。く。も。前。渡。け。著。者。演。を。目。送。之。晚。縮。と。共。身
 邊。葛。石。尻。を。搦。て。那。們。還。る。来。る。志。と。立。ぬ。去。て。在。り。け。程。小。晚。縮。今。宵。看

病の奴婢們が由り復々を繰返さず正木の葛根の絶て長死別れをなす欲ぞ
人を恨むの悔吝愛惜喞言小果一を著者演禁め拵大七を又愚痴の詩言を知
む小六を然角よりその心操はるる才も器量も千萬人か立捷りこれこそ文学武藝
両多うその妙奥を極めおぼろけき狂乱の劇疾を犯きて逝て返らぬ這河水自身を
論めい前世の約束事でありけんか。今を諦せ那英直の俺が年来の相識ありて况
送小義を結びて俱小異姓の兄弟小の工の苦勞も身をかたえたるを英直が臨
終小の妻母屋小箇様々といひ俺を頼ん為のその故小英直が俺小與り一書箇中
一丁の字も寫され感素紙をありて事情を猜する英直年来俺が兼愛の趣を
傳へてせ小憑くはとも素より俺と二面の交りければ任々とひよりあるは故小只妻小
の箇様々といひ誘へて妻と子を俺小寄る小空緘る素紙をせし口を必よくその
意を猜し癖ひで需小応を義氣ありと知ればその故小俺も亦その假言を真とて

渾家おの機密を知らせ九ヶ年心を盡きた意中の情義のけ一夜艾の比首画餅
とる憾の渾家が獨悔と歎喞言小千萬倍の慷慨と限りもあはね死生の命
あり今ゆく惜めがとも暨ん那英直の新思の餘類脇屋の家臣あり俺初より
ゆらる小六を英直夫婦の手を是則その亡君義隆朝臣の死子よの義をうへる
日まて俺もつち知らざりふの花水橋よりおとる目四郎より破落戸が懺悔小よ
して不憶這実説とるる那目四郎九ヶ年前假名川の客店にて英直が病中に母屋
送言せしと料を竊聞する小六が素生を知りぬといひお介る小當国の眼代は
藤白隼人正安同の箇様々たる年来俺と快ら志心刃を磨るりのるは那目四
郎が慙々の支あり時安同の件の機密を生戸とて安同これ便りをして小六をうへ俺も
亦逆謀ありと詭訴してその宿怨を復さんと謀ると既小急之然が義の背を俺も
命を惜まらざる野心を宣解とも免れざるをうへ小六も脇屋の公達

ろの死とぞつらふのどとぞ。英直母屋の孤忠節操感さるるもの。俺身と俱よ非
 めのころ。命は殺さるる年来の博愛を氣節の只這一事小虚なれども死に實土黄泉あて
 英直夫婦何といえ舜のいさ起らぬ先小六を他郷へ遣りしとぞいかにぞ
 生るものも暇もあて入水の跡たづみ来り送憾ちの言語の筆もめを盡され覺意
 悲歎愛哀苦勞の心裏のるる察しぬも目と屢瞬く真実深意世小又
 類のめは情由と初てぞ晩稻のいひさるる。皮川の水と堰
 この一涙の涙を瀕るをける。身の憂ゆや兵竹の計敷久く願ひる小六もぞ親父母の
 密談密意を洩して且救馬を且歎く心はるる。俺大人の俠氣義勇即人の及ばぬ
 所也今もめ及ばぬ。空城る素紙を受けてその意も悖らるる。素より知己のありち
 る。俺身と養ひてとる患を共し。災に分つといひ往古の游侠義士も類單され
 らのようは姉母も。知る只願亡夫の義兄弟とぞいふ況や俺はけいもぞ知る。

絶てさるる。又遭て死別あ及びて重なる。ふきは重恩と情の縁由。外から聞く這
 身の薄命実の親も異なりぬ九十年以来親育の親あ一日も孝行なく仕へる
 せで詭の横死と示す親と養父の仇を殺して那禍鬼もうち穰んとせぬ。允させぬ
 いえあひの苦れた會月のもあろ。口説作。合と伏拝めども影の隠ま。蓋取
 竹の敏系。下の抱及。屈ぬ節も短夜の。も曉。感涙の外多り。は。浩処。字
 六画七の衆人と共侶。又船あち乗りて。這方の河原。還り。却著演。報る。中
 仰付られ。前。渡。と部を定め。陸。水。も。今。郎。の。亡。骸。も。生。骸。も
 又。路。津。高。師。著。演。晚。稻。の。對。して。齊。既。如。母。の。水。は。高。け
 れ。石。も。流。き。早。河。も。身。を。投。入。の。亡。骸。を。索。ひ。の。益。且。々。還。る。の。め。の。り。れ。て。本。意
 る。野。上。支。婦。の。嘆。息。も。勞。さ。る。身。を。起。せ。ば。明。も。横。雲。の。間。より。名。告
 る。杜。鵲。冥。土。の。鳥。も。見。を。頼。む。死。天。の。旅。ある。残。の。月。影。も。共。に。流。る。河。水。も。妻。時



女家傳第一冊卷上

北五
皇王上室印發

像贊六套有像一十四頁
贊詠廿首作者所自題也

有像第十四



河水のわたるかたの辰のれいも
夫妻趕到夜回津
あふ津とあつたをさうへてて

女家傳第一冊卷上
車卷五

皇王上室印發

廻向の弥陀唱名親の誓願とて子の數あるのと知りぬ長竹の世の憂はるるを以て此
 べ形なき夢路を辿り心地と覺ぬ迷ひの夢なる涙は流し而神の朱を奪奪(紫は灰後
 れる藤澤の宿所)と投て衆人を俱と徐に還りけり然程は草履演のその次の日も死の目も
 人を相横川の頭へ遣と小六が亡骸を索ひては此の便宜もさるる一か絶れぬ以て絶れ
 とも里人們の亡骸を索得たりとの知と小六が渡船を脱捨る半隻の庭草履をさ
 終小極は斂めて菩提建摩の示寂の後棺内より半隻履の外をとりては此の故事城
 かりものゝ不樂いゆべ。恁而著演の小六が亡骸を夜より第五首の黄昏事件の空棺と
 擲出させて遊行寺へ送り遣り程は藤澤南御の里人のゆえ五里六里四方を遠く村
 落ののまも信へ生話續地で吊送せしもさるる一か然も廣に遊行寺の本堂の中
 客殿の中所狭まて聚令と三千餘名と記けり。這日の施主の野上奴婢之助と五六個の
 所親より導師并に大衆へ布施るども英直母屋を安葬す。時より一人心を用ひて

法筵をて丁寧に著演。那日より則嫡子の巨服を受けて喪の籠りたる程。以て心小
 累中。小六を不慮に世を去りこれに安んじ居飽むと鎌倉の還るの後たてて謀
 訴と俺と亡さんとを謀らる。遮莫小六が在るを恐るるゆゑに怖る足と縁も倘檢
 宅をさせられ折の身目四郎を遣り。脇屋の家譜と菊文字の短刀を他におくれ
 辨むがうくるるぬべ。より隱さぬと尋思とて妻も告げ只ひとり小六が子舎へ赴
 して彼此と撥撈ふ然る東西絶てさるる一か疑訝と。鍵をたゞ衣箱とひいて
 内中ある衣を出てみる。おや母屋が像見の衣と那の誰(這)某と小六が母を写
 した紙牌を附する。登時著演さる。是等の衣は小六が母の服鬘の折紀念ゆとて
 奴婢們の取り取せんと。膝より信擇做と措けり。痛きやその服鬘はあふも。人
 とさる夢の跡筆の蹟は母も子も歎を遠き紀念を今空されとさるる一か隙も
 ある。死ふ忘れぬ愛惜の迷ひとそと胸の弱るるを料とる。彼れ彼と取せられ

不ビ。字紙小包。金三ありて。金子二百五十兩家尊家母刀貞と記す。訝りきり封皮に折る。懐へる小數も違つて。什麼のふと。這金を小六に藏置るけん。疑ふのふと。さるるらま。思惟るふと。英直の送金。艱苦の中。用ひの減さ。只幼君が。とて。その妻母屋の逸とせ。後母屋の年来秘措。身後小六が。又中へ。俺と。晩福亡母親の紀念と。贈んと。多と記す。け。是を。彼の。忠臣義子の用意の。格別英直母屋の幼君の。為の。と。よ。これを。用ひ。小六。恩と。義の。為。亦。這金を。み。う。用ひ。前後兩度の安葬と。并。その。身を。養育の。恩。答。紀念。金。竟。その。身の。要。る。東西。と。多。を。豫。より。覺。期の。所。為。あ。む。と。ふ。と。の。蛇。が。知。芝。写。送。一。けん。十二。言。の。送。墨。の。寸。壁。年。の。總。ふ。十七。歳。の。あ。り。も。夏。毛。を。一。期。と。さ。る。あ。で。命。毛。短。さ。の。鳴。平。義。多。哉。小。六。が。用。心。噫。嘻。忠。る。哉。館。氏。夫。妻。只。是。主。従。一。對。の。賢。才。英。智。の。幸。あ。り。天。平。命。平。造。物。者。の。惜。て。年。を。奪。ひ。後。任。せ。反。の。死。

喪の憾哀。多。と。ち。音。ふ。と。る。夜。鶴。の。子。多。感。親。心。堪。ぬ。歎。た。ま。う。筆。の。あ。ひ。へ。の。眼。包。を。拂。か。て。金。を。包。一。枚。の。字。紙。を。徐。引。伸。く。と。れ。が。も。亦。小。六。が。筆。の。口。の。習。の。中。う。ふ。と。これ。も。死。や。と。流。落。よ。ま。得。ひ。か。か。ま。の。い。ま。の。あ。れ。あ。の。助。則。と。ん。写。一。る。是。が。あ。ろ。の。ゆ。が。不。意。中。の。あ。ら。う。吟。と。れ。が。則。折。句。也。五。七。五。七。の。句。の。上。下。の。脇。屋。美。隆。之。子。曾。と。そ。の。の。あ。ら。う。吟。と。れ。が。則。折。句。也。五。七。五。七。の。句。の。上。下。の。こ。こ。に。や。よ。り。た。う。の。こ。と。と。ふ。一。十。言。を。措。る。は。あ。ら。う。吟。と。れ。が。則。折。句。也。五。七。五。七。の。句。の。上。下。の。感。さ。る。と。平。响。を。り。の。ゆ。が。不。意。中。の。あ。ら。う。吟。と。れ。が。則。折。句。也。五。七。五。七。の。句。の。上。下。の。を。し。り。れ。ば。竊。み。羞。て。這。筆。遊。が。及。ぶ。あ。ら。う。吟。と。れ。が。則。折。句。也。五。七。五。七。の。句。の。上。下。の。こ。の。こ。ろ。に。詠。草。の。名。を。助。則。と。寫。せ。り。酒。曾。祖。義。助。卿。の。諱。の。一。字。を。取。る。本。意。の。必。額。髪。を。剃。と。佳。字。と。れ。彼。と。撰。と。名。も。花。押。と。も。定。給。と。思。ひ。か。も。初。秋。ま。の。母。親。の。服。中。あ。れ。が。黙。止。せ。り。他。の。も。あ。ら。う。吟。と。れ。が。則。折。句。也。五。七。五。七。の。句。の。上。下。の。懐。余。似。れ。も。名。を。送。と。返。ま。人。も。存。れ。何。せん。紀。念。の。金。を。憾。る。は。益。か。ら。る。と。嘆。

息の声の洩さぬ襖戸の板厨をきき又推用て衣も金三三替の随ふ衣箱も斂をき
る不隈もみる。又那家譜の巻軸と短刀を案ずり似たる東西をみる。疑念
弥増と那目四郎が任事とひつる虚談然らざる見たる。夕飯一炊或は母屋は
免より人あそびれんを恐れ遠くぬ山の石室をいふ秘措たるあはる。後必のそと
綻回もまきまきれば冬山の山木を摧れ花を求め夏の池の水を掬て氷の厚を搦ふ
似る。おもひ益々と咲いて却晚稲のほほ筒様と是等の綻の趣と具小耳はかせし
ゆ。晚稲のゆづらち歎かす。連り袖を濡る事情をき知る。奴婢之助もきき
まきまき小六がのこりつけと樹影々とて樂まき過る。のこり親を泣く泣くせし童
蒙心もあつまる。然程小館小六助則に相模川原の竹藪に陰を晝も躰を夜に
出く。密に彼此人の風声を探りて五六夕及ぶ程小館小六が亡骸を案
得るといふ。遊り寺へ安葬する。その綻の爲体。巷談街説異同を既に正

く小館えいふ心安とよひて。竊小相模川より渡りて小田原の里へ赴く。御ふ
宿所を狂ひ出し。折の終ふと臥破ひとて。差有るの。夜討の準備あるとされれば
朝市より骨董店より故衣を買んと。彼此と遊獵る程。尚巳時可る。口早威の
身甲と薄録の甲手臈着長二尺三寸。大刀さへ一口あり。請取て扱て。小館
銘るれも。夏も海寒く。焼刃の匂微妙とて。露を合。朝の櫻の真盛る。異なる。毛
敷るが石も。辟かぐ。良刀とると。以て。衣共俱。小件の武器。皆采。買とる。人。死
処へ赴く。心も。身も。固め。打粉。打と。想像。下。菊文字の短刀。小件。大刀。と
佩添。那巻軸の袱小包。腰小結。着。その。曠。氏。目。の。潜。身。小。底。倉。を。投。て。の。程。小
樹下。暗。麓。路。の。脊。の。方。人。の。と。や。野。上。の。今。郎。等。せ。あ。と。呼。け。り。此。是。甚
麼。人。を。其。編。續。地。巻。を。易。て。第。二。集。の。筒。端。小。解。分。を。聽。絲。か。し。
用。卷。驚。奇。俠。客。傳。第。一。集。卷。之。五。終

○曲亭翁新著俠客傳第一集畫者筆工刷人目次

有像一十七頁 江戸

溪齋英泉



淨書筆畀 江戸

谷金

川

繡像剖刷 江戸

朝倉伊

知八

全卷刊字 京都

井上治兵衛

俠客傳第二集

曲亭翁著 全五卷

此の集は前集の小六助則が復讐の夏子起す楠姑麻子媛の列傳に至る
その間新奇絶妙の趣向最長第一集後集の後年内打續て出板遅滞する

近世説美少年録

曲亭翁著 第一輯 第二輯

同第三輯 全五卷

今洋の新編を製本既出来右俠客傳第一集と同時に小賣出

○家傳神女湯

第一婦人のみちの妙茶法病を治す世にのみちの賣茶をいふと云ふはまじり
其料の多くを以て名をなす用ひたる功ありと云ふ事 一包代百兩

○精製奇應丸

其料をそそみせいのうと云ふはまじり
夏にのみちの神女 大包代金貳朱 中包代壹朱 小包五ト たる不仕の

○熊膽黑九子

金のけしと九子とをまじりてその功を神妙なり 一包代五朱

○婦人の珍虫の妙藥

ついで虫のくまを治す功ありと云ふはまじり
一包代壹朱 中包代壹朱 小包五ト たる不仕の

製藥本家 江戸神田明神下同朋町東横丁

龍澤氏

弘 所 元飯田町中坂下南側よもの向

たに沢氏

天保三年壬辰正月吉日印發

江戸小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

大阪心齋橋筋博労町

河内屋茂兵衛

○古今愛蔵ある仙女香 一包包 〇黒あぶ美香 四十八文 江戸京橋南(三丁目)角 坂本氏

